

デカルト哲学の形成

——その二、デカルトの夢、ベリユルとの出会い——

はじめに

デカルトは、機械論的自然観の形成に力を注ぎつつ、智慧の探究、哲学の原理の確立をめざし、一六四四年、『哲学原理』*Principia philosophiae*の公刊をもって、ほぼその体系を確立するに至るのであるが、その過程で「瀆神の不安」⁽¹⁾に悩まされたふしもある。

デカルトは、一方では、神の存在証明に多くの努力と時間を費しており、「神の誠実さ」*veracitas dei*の概念そのものが「延長実体」⁽²⁾物質の存在根拠となっている。しかし、それは、パスカルの「デカルトはその全哲学のなかで、できれば神なしですませたいと思った。だが、かれは世界に運動を与えるために、神に最初のひと弾き⁽³⁾をさせないわけにはいかなかった。それがすめば、最早デカルトは神を必要としない」⁽⁴⁾という批判に対しては殆んど無力であるように思われる。デカルトの機械論的自然観における「神」は、なるほど、最初に登場して「ひと弾き」をして

原田 佳彦

くればあとは御用済みとなるたいへん都合の良い「神」であった。それは、「封建的秩序の中核をなした中世的な神ではなくて、新旧両勢力の均衡の上に立つ絶対王制の根拠をなす『王権神授説』の『神』にまさしく照応するような、いわば、大義名分のための神、御用的な神、調停のための神であった。」⁽³⁾

仮りに、神が想像的空間のどこかに、新たな世界を組み立てるに足りるだけの物質をつくったとして、しかも神がこの物質の様々な部分を、様々にかつ無秩序にゆり動かし、詩人の想像するような混乱した混沌状態をつくり出したとして、そのうえで、神はただその通常の協力のみを自然に与えて、神の定めたひとつの世界において起こるであろうところのものについてのみ、私は語ろうと決意した。⁽⁴⁾

しかし、デカルトは、神をただそれだけのものとして考えていたのではなかった。カトリックの護教家⁽⁵⁾であったかどうかは疑わしいが、少なくともカトリックの教義に反するようなことを公然と主張することに対しては異常なまでに用心深かった。尤も、そうであったがゆえに、デカルトは無神論的な革命思想家であった、あるいはむしろプロテスタントに近かったのではないか、という解釈⁽⁶⁾もあながち可能性がないと斥けることはできないであろう。「デカルトの宗教は、その外面においては単純素朴である。内面においては、……それはほんとうかがい知るべからざるものである」。⁽⁷⁾

デカルトにおける神の問題は解釈のわかれるところだが、ここではさしあたり三つに分けて考えてみよう。第一にデカルトの思考全体の根源にある神、次に機械論的自然観における、いわば「第一原因」としての神、そしてデカルトの世俗（社会）生活における、つまり「乳母の宗教」⁽⁸⁾カトリック教会の神である。

デカルトは、自己の道徳を三つの格率^{マクス}というかたちで述べている。すなわち、自分が生れた国の法律、宗教、習慣

に従うこと、行為に際してはできるかぎり毅然とした態度をとること、そして運命によりも自己にうちかつことに努めること、の三つである。⁽⁸⁾

これらの格率は、デカルト自ら言っているように、あくまで「仮の（暫定的）道德」*morale provisoire*であって、デカルトの使命のひとつ——「一現象だけではなく、私は自然の全現象を、つまり全自然を説明しよう、と決意した」⁽⁹⁾——機械論的自然観の形成の意志を根拠づけることはできなかった。デカルトはむしろその思想を形成して行くうえで、他のものにわずらわされないように三つの格率をつくりあげたのである。

デカルトは、その思想形成を「ただひとり、闇のなかを歩むように」⁽¹⁰⁾進めていった。では、デカルトは何によってその孤独に耐えたのだろうか。われわれは、それを、デカルトの思想営為の出発点にある二つの体験のなかに見出すことができよう。先ず第一に一六一九年十一月十日の神秘的体験であり、そして時の宗教界の大立者ベリユル枢機卿との出会いである。

註

- (1) Henri Lefebvre, *Descartes*, t. I, 1947, P. 97.
- (2) Blaise Pascal, *Pensées*, fr. B. 77.
- (3) 中村・田島・生松・古田『思想史』一九六二年「一六ページ」。
- (4) *Discours de la méthode*, 5e part., A-T. t. VI, P. 42.
- (5) Alfred V. Espinas, *Descartes et la morale*, 1927 ; Henri Gouhier, *La pensée religieuse de Descartes*, 1924.
- (6) Maxime Leroy, *Descartes, le philosophe au masque*, 1929 ; *Descartes social*, 1931.
- (7) Alain, *Idees, Introduction à la philosophie*, 1939, coll. 10/18, 1969, p. 208 桑原 野田訳『デカルト』一六七ページ。
- (8) *Discours*, 3e part., A-T. t. VI, p. 22-31.
- (9) *lettre à Mersenne*, 13 novembre 1629, A-T, t. I, p. 70.

二、デカルトの夢——一六一九年十一月十日——

ベークマンと別れたデカルトは、戦争（三十年戦争）に招き寄せられ、一六一九年四月二十六日ブレダをあとにする。アムステルダム、コペンハーゲンを経て、フランクフルト・アム・マインでドイツ皇帝フェルディナント二世の戴冠式を見物し、バウアリア公マクシミリアンの軍隊に戻る途中、折しも冬の初めドナウ流域ウルム近郊の「^{ホッ}炉部屋」に終日独り閉じこもり思索にふけたデカルトは、その思想形成のうえでベークマンとの邂逅に次いで第二の契機たる「神秘的体験」をもつことになる。

一六一九年十一月、デカルトはドイツのウルム^{Ulm}近郊の寒村にとどまり、「そこには、私の気を散らすような話相手もおらず、そのうえ幸いなことに、心を乱すなんの心配も情念もなかったので、終日、炉部屋にただひとり閉じこもり、このうえなくくつろいで思索にふけた。」⁽¹⁾ 四十年ほど前にモンテーニュ Michel de Montaigne, 1533-1593 が心地よさを味わった炉部屋で、⁽²⁾ 思いをめぐらすデカルトが考えた「最初のことのひとつは、多くの部分から組みたてられ、多くの棟梁の手でつくられた作品には、多くの場合、ただひとりが仕上げた作品ほどの完全性はみられない、ということをいろいろな方面から良く考えてみようと思いついたことであった」⁽³⁾。

その結果、学問もまた同じであることがわかり、デカルトは「自分自身の思考をつくり直し、全く自分だけのものである地盤のうえに、それを打ちたてるように努めよう」⁽⁴⁾ との意図をもつにいたる。そして、「他をおいて、この人の意見をこそ取るべきだ、と思われるような人を選ぶことができず、いわば自分で自分を導くことを強いられ」⁽⁵⁾ たのである。

こうして、「全自然を説明しよう、と決意し」、さらに人間の学としての哲学を模索しつつあったデカルトは、一六一九年十一月十日の夜、運命的な三つの夢をみる。

この夢の内容は、デカルトの伝記作者バイエ Adrien Baillet, 1649-1706 が、「一六一九年十一月十日、靈感にみたされて、私は驚くべき学問の基礎 *mirabilis scientiae fundamenta* を発見しつつあった」⁽⁶⁾ という文章で始まっている、今は散佚してしまった『オリンピカ』*Olympica* に拠って述べているところに従えば、次の通りである。⁽⁷⁾

デカルトは、眠りについた後、想像のうちに、自分の前にいくつかの幻が現われたことに脅かされた。デカルトは、これにひどく恐れを抱き、街を歩いていると感じながら、行きたいと思っている場所に思うように進めなかった。そのうちに一種の旋風にまきこまれ、一步毎に転びそうな気がしたが、路辺に戸口の開いている学院を認めたので、その中に入り、祈りを捧げに行こうとして学院の教会に辿り着こうとした。しかし、知人に挨拶をしないで通りすぎたことに気づいたので、引返してお辞儀をしようとしたが、烈風に教会のほうへ押しやられてしまった。

このとき、学院の庭で別の人に会い、その人は鄭重にデカルトの名を呼び、N氏に会いに行けばN氏がデカルトに何かくれるものをもっている、と告げた。デカルトは、それはどこか異国からもってこられたメロン⁽⁸⁾だと想像した。しかし、デカルトを驚かせたことは、この人とその周囲に集まった人たちが、デカルトは依然身をかがめてよめいているのに、まっすぐに両足でしっかり立っていることだった。デカルトはそこで目覚め、実際に身体に痛みを感じた。デカルトは、それが自分を誘惑しようとした悪霊の仕業ではないかと思い、それから身を守ってくれるように神に祈りを捧げた。これが第一の夢である。

その後、約二時間ほど、この世の善悪について思いをめぐらせ、再び寝入った。するとすぐに、落雷の轟きと思われるような激しい音が聞え、恐怖の余り目が覚める。目を開くと無数の火花が部屋中に拡がっているのが認められ

た。

デカルトは、雷鳴は真理の靈の合図、彼を襲った恐怖の念はこれまでの生活で犯してきたであろう数々の罪に対する良心の呵責であると解釈し、恐怖も和らぎ落着いて再び眠りについた。以上が第二の夢である。

暫くして、デカルトは第三の夢をみたが、それは第一、第二の夢のように恐ろしいところは少しもなかった。

机の上に本があるので、それを開いてみると辞書だった。デカルトは、その辞書が自分にとって非常に役立つと思われたので有頂点になった。そのとき、別の一冊の本が見出され、それが『詩人集成』*Corpus poetarum* という詩集であることがわかった。それを開くと、「いかなる生の途にか従わん」*Quod vitae sectabor iter?* で始まる詩句に出会った。そのとき、ひとりの見知らぬ人がデカルトに「然りと否」*Est et Non* で始まる一篇の詩を示し、これを優れた詩だとほめた。デカルトは、それは机の上にある詩集のなかのアウソニウス *Ausonius* の『田園詩』*Idyllia* の一篇だと言って、詩集をめくり始めた。デカルトがその箇所を探していると、その人がその本をどこから手に入れたのかと尋ねた。デカルトは、どうして手に入れたのかはいえない、またちよつと前に別の本を手に入れたが、その本は消えてしまい、誰がその本をもってきたのか、誰がもっていつてしまったのかわからない、と答えた。するとその本が再び机の端に現われた。デカルトは、その辞書が最初に見たときのように完全なものではないことに気づいた。その間ずっと探し続けていたアウソニウスの詩がどうしても見つからないので、デカルトはその人に、同じ詩人のもっと美しい「いかなる生の途にか従わん」で始まる一篇を知っている、と言った。その人がそれを見せて欲しいと頼んだので、デカルトは探し始めたが、そのとき偶々銅版刷りの小さい消像画を何枚か見つけた。そこでデカルトは、この本を非常に美しいけれど、自分が知っている本とは印刷が違うと思った。

ちようどそこで、本とその人は見えなくなり姿を消してしまつたが、それでもデカルトは目を覚まさなかった。注

目すべきことは、デカルトが眠ったままでそれを夢だと判断し、眠りから醒める前にこの夢の解釈を試みていることである。デカルトは、辞書は全ての学問の集成であり、詩集は哲学と智慧との統一を意味している、と判断した。なぜなら、デカルトは、詩人たちの作品は哲学者の書物に見出される章句に比べてより意味深い、より分別に富んだ、より巧みに表現された章句に満ちていることをそれほど驚くべきことは考えていなかったからである。(9) デカルトは、この奇蹟を靈感の神聖さと想像の力に帰していた。詩人の想像力こそ、哲学者の理性がなし得るよりも遙かに容易に、遙かに多くの輝きをもって、全ての人々の精神のなかにあたたかき燐石のなかに火花があるように宿っているのである。

さらに夢の解釈を続けて、デカルトは、「いかなる生の途にか従わん」で始まる詩篇は智慧にまで至るための賢者の教え、あるいは道德（キツル）を意味すると判断した。こうして、夢を解釈しながら、デカルトは目を覚ます。

以上がデカルトの三つの夢だが、デカルトは目覚めてから改めて夢の解釈を試みている。恐怖の念を伴った第一、第二の夢は、人間の前ではともかく、神の前では汚れないものではなかったかもしれない自分の過去についての良心の悔悟を、そして第三の夢は、将来の希望を意味している、とデカルトは考えたのである。

学問と智慧との綜合をめざし、それをただひとりで切開いて行こうとしたデカルトは、夢のなかで、真理の霊があらゆる学問の秘庫を開示しようとしてくれたことによって、自己の進むべき途を神から保証されたと信じていることができた。

デカルトが生きた十七世紀前半の思想的風土は、中世以来のカトリシズム、そしてルネサンスに端を発し、とりわけモンテーニュによって深く刻印され、以後のフランス思想を貫くユマニスト的、モラリスト的思考、および近代的な数学的自然学という三つの原理から構成されていた。

デカルトは単なる科学者ではなく、ユマニスト、モラリストとして、智慧の探究と自然学との統一をめざしていた。⁽⁴⁾ それ故、デカルトは、数学的考え方の全自然への適用——機械論的自然観の形成に赴くに際して、躊躇し、恐怖の念、「渾身の不安」を感じたのである。恐怖の念を伴った第一、第二の夢は、単に過去に関連したものであるだけではなく、このような不安、将来についての恐怖でもあった。この、将来の思想営為に対するデカルトの不安を解消し、機械論的自然観の形成への巨大な一歩——アリストテレススコラ的な神と人間との結びつきを基礎とする自然観から、神との結びつきを断ち切った近代的な幾何学的自然観への画期的転換——を踏み出すことを保証してくれたのが第三の夢である。デカルトは、実は、神によって、神不在の自然を保証してもらったともいい得るのである。デカルトの夢、神秘的体験は、あくまでも将来に向けて貫かれている。そして、第二の夢の「雷鳴の轟き」、すなわち「真理の霊の合図」は、その恐れを取り除き、今後のデカルトの生の歩みを保証してくれるもの——保証の願望のあらわれにはかならない。

註

- (1) *Discours*, 2e part., A-T. t. VI, p. 11. 但「この時期のデカルトの足跡は必ずしもはっきりしたものではない。」
- (2) Samuel S. de Sacy, *Descartes par lui-même*, 1956, p. 26. 三三三頁。Michel de Montaigne, *Les Essais*, t. III, chap. XIII.
- (3) *Discours*, 2e part., A-T. t. VI, p. 16.
- (4) *ibid.*, p. 12-13.
- (5) *ibid.*, p. 16.
- (6) *Olympica*, A-T. t. X, p. 179 sq.
- (7) Adrien Baillet, *La vie de Monsieur Des-cartes*, 1691, p. 81-89.

- (8) このメロンは、純粋に人間的な関心から求められた孤独の魅惑を意味しているとのことである。 Baillet, *op.cit.*, p. 186.
- (9) cf. *Discours*, 1^{re} part., A-T. t. VI, p. 7.
- (10) cf. Léon Brunschwig, *Descartes et Pascal lecteurs de Montaigne*, 1945; Fortunat Strowski, *La sagesse française*, 1925.

二、ベリェルとの出会い——一六二七年——

こうして、内面の不安をとにかく解消し、将来への希望を抱いたデカルトは、再び旅に出るべく「炉部屋」を出て、続く九年の間、ヨーロッパ各地を遍歴する。この間のデカルトを追跡する余裕はないが、われわれは再びこの放浪者の不安に、そしてこの度は外的な不安に目を向けてみよう。

デカルトは、彼の研究しようとすることのなかに『乳母の宗教』に背馳する惧れのなきにしもあらざる所以のものを看取って心ひそかに不安を感じた⁽¹⁾のではなかったか。なるほど、デカルトは、終生、カトリック教会から異端とみられることを恐れ、異常とも思える細心の注意を払ったことは確かである。しかし、デカルトは、その娘フランシーヌ Francine, 1635-1640 の洗礼をオランダはデフエンテル Deventer の改革教会^{ネグリース・レフオルム}で受けさせ、数年後は、パリのサント・シャベルの関係者に預けて教育を受けさせよう、と計画した⁽²⁾ことから推察すると、カトリックとプロテスタントとの関係においてかなり便宜的な態度をとっているかに見受けられる。デカルトの神は、キリスト教の枠から出ることはおそらくなかったであろうが、教会宗派^{セクト}の神ではなく、デカルトの生と思想営為の根源にある、より深く内面的な、倫理的な神であった、といい得るであろう。

とはいえ、いうまでもなくデカルトが現実にした社会は、崩壊のきざしをみせつつも、やはりカトリック教会の

力は極めて強かった。内面的な不安を、ともかくも、一六一九年十一月十日の神秘的体験によって乗越え得たデカルトは、「乳母の宗教」に悖らないという格率をたて、できる限り社会から遠ざかり、「良く隠れて生きた」のであるが、それでも教会との衝突の不安をおさえることができなかった。

とりわけ、ジェズイット（イエズス会）との関係で、デカルトのこの不安を、解消とまではいえないかも知れないが、少なくとも和らげてくれたのが、一六二七年十月、あるいは十一月の、オラトワール会のベリユル枢機卿 Pierre de (Cardinal de) Berulle, 1575-1629 との出会いである。⁽³⁾

ベリユルは、一六一一年十一月十日、フランスにオラトワール会を創立し、トミスムよりもアウグスティヌス説をとり、ジャンセニスムの指導者サン・シラン Saint-Cyran, 1581-1643 に深い影響を与えた宗教界の有力者である。⁽⁴⁾

オラトワール会は、イエズス会と対立し、数学的自然学の発展に背を向けることなく、機械論的自然学を承認する方向に進み、その上に立って、神の絶対的自由を主張した。ベリユルの弟子で、イエズス会からオラトワール会に移ったジビエ Guillaume Gibieuf, 1591-1650 は、デカルトと後年まで親しく交わり、「ソルボンヌにおいて、『デカルトの』『省察』 *Meditations de prima philosophia*, 1641 を弁護したり（しなかったり）するようになる」。⁽⁵⁾ 神の自由の問題に関して、デカルトはジビエと同意見であると述べている。⁽⁶⁾

さて、ベリユルとの出会いは、一六二七年十月、あるいは十一月のある日、パリにあったローマ教皇特派使節バーグノ Guidi di Bagno, 1565-1640 の邸で、シャンドゥ シeur de Chandoux なる人物がアリストテレス・スコラ哲学を攻撃し、哲学の革新を説いた会合がきっかけであった。その場に居合わせた人たちはシャンドゥの話に深い感銘を受けたが、デカルトだけは余り感心した様子もないので、ベリユルはデカルトの意見を強く求めた。そこで、デカルトは、シャンドゥによる哲学の革新の意図には賛成しながらも、シャンドゥ自身の哲学が、その原理において曖昧であり、その方法においては古く、結局のところ、「真実らしく」みえるだけにすぎない、ということを具体的な事例

をあげて詳細に論じ、哲学において、より明晰で確実な原理を樹立し、それによって、自然がもたらしてくれる成果を一層容易に説明することも不可能ではないと信ずる、と述べた。デカルトのこの発言に万座の人々は感嘆し、その原理を書物に著わし、広く公衆に知らせてくれるように、デカルトに要請したという。⁽⁷⁾

かつて、……ベリユル枢機卿、メルセンヌ神父 Marin Mersenne, 1588-1647 をはじめ、並居る高名な碩学の人たちと交した談話のなかで……私は、正しく推理する術が余り学識のない人々の精神に対してどれだけのことをなしとげることができるかということ、そして、私の原理が、学者たちの間で既に受け容れられているいかなる原理よりも、いかにより良く確立されており、一層真実で自然なものであるかということをもその場に居合わせた人たちに認めさせました。⁽⁸⁾

デカルトの話を、とくに強い感銘を受けたベリユルは、それから数日後、デカルトを招いて、長時間、デカルトと話合った。この会見で、デカルトは自己の哲学と今後の計画とをベリユルに伝えた。さきに述べたように、オラトワール会の創始者であるベリユルは、目的論的自然観を斥け、自然を機械論的にとらえ、神と人間のみが自由な存在である、との考えに立っていたので、デカルトの計画を良く理解し得たのである。ベリユルは、デカルトに対して、神が他の人々には授けなかった精神の洞察力をデカルトに与え給うたのであるから、神の光明を受けたデカルトは自らの才能の使用について、人間の至高の審判者たる神の前に、その報告をする良心上の義務があり、そしてまた、神はデカルトの仕事を必ずや祝福し給うであろうと述べ、デカルトを激励した。

一六一九年十一月十日の神秘的体験によって、自らの思想營為に対する確信と神の保証とを得たデカルトは、イエズス会に対抗していた、カトリック教会の有力者ベリユルの知遇を得るに至り、自己の立場に対する社会的、現実的

保証をも見出すことができたのである。こうして、内面的な、そして社会的な不安をとにかくも解消し、克服し得たデカルトが、その生涯をかけて形成して行つた哲学と機械論的自然観とは、両者共に切り離されることなく、中世から近代への画期的転換をもたらしたのである。

数学的合理性と実証性との結合によって構成される機械論的自然観は、自然を神から切り離し、それによって、人間は自然の支配権と所有権とを獲得したのである。「自然の支配者かつ所有者」となった人間は、「地上世界の様々な果実とあらゆる便宜」^⑧「この世の第一の善であり、かつ他のあらゆる善の基礎たる〔精神の健康を含め〕健康の保持」^⑨など、つまり「一般的幸福」^⑩を得ることができるようになるであらう。

自然を「延長（たて、横、長さ）」に還元し、アニミスティックな質的、自然的自然から脱却した人間は、ここに初めて、その精神の自由と主体性とを確立することができた。

宗教と科学との緊張関係のなかで形成されたデカルトの機械論的自然観は、こうして、近代を切り開く思想になるのである。デカルトのコギトは、アウグスティヌスの場合とは異なり、^⑪機械論的自然観と密接な関係をもつことによって、近代の自由な主体的個人の原理として確立された。ルネサンス以来、政治、経済、宗教などの各分野で、その存在と自由、独立の主張を模索しつつあった人間的自我は、ここに初めて、その思想的原理を見出すに至つたのである。そして、デカルトの哲学は、宗教と科学との緊張関係のなかで、「無限実体」たる神の誠実を想定することにより、宗教と科学との対立に暫定的な一種の均衡をもたらしたのである。

しかし、機械論的自然観によって神から自然の支配権を奪つた人間は、他方、個人の自由と独立とを主張することにより、神との結びつきを断ち切ってしまった。神と結びつくことによって自己の存在を根拠づけ、宇宙のなかでの安定と心のやすらぎを保ってきた人間の前から、神はその姿を消し、宇宙から立去つたのである。

かくして、人間存在は、絶えざる不安と動揺とにおびやかされ、他方、自然の支配者、所有者でもあるという不確

実な矛盾的存在となった。ここに近代の本質的な矛盾がある。

この無限の宇宙の永遠の沈黙が、私をおののかせる。⁽³⁾

* * *

しかし、われわれはいささか結論を急ぎすぎたようだ。ペリユルと出会ったのち、デカルトはまたしても、そして今度は決定的にフランスを離れ、一六二九年、オランダに移り住む。『方法叙説』の公刊は一六三七年まで待たなければならぬ。デカルトの完璧なオランダ隠栖——ほとんど誰にも住所さえ明らかにせず、引越しを繰り返す——の二十年。しかし、だからといって、デカルトは友人たち（王女エリザベトを含め）やヨーロッパの思想界と無縁になったわけではもちろんない。数少ない著書に比して、歴大な数の書簡が残されている。書簡の哲学者とも呼ぶべきデカルトは、文通によって思想界の動向を知り、手紙のなかに自己の真情を吐露している。とりわけ、デカルトの連絡係として、ときには論争相手、反対者として、生涯デカルトとの交友を続けたメルセンヌ神父の存在は、デカルト哲学の形成に際して見逃すことができない。次稿では、デカルトとメルセンヌとの交流について若干の考察を試みる。

註

- (1) 所有章节『デカルト』I、一九六七年、五七ページ。
- (2) Samuel S. de Sacy, *op. cit.*, p. 120-122. 邦訳「一二六—一二七ページ」。
- (3) cf. Etienne Gilson, *La liberté chez Descartes et la théologie*, 1913, part. I, chap. V.
- (4) Louis Cognet, *Le jansénisme*, 1961, p. 21-25.

- (5) Rainer Specht, *René Descartes*, S. 25. 中論證の二つ
- (6) lettre à Mersenne, 27 mai 1630, A-T. t. I, p. 153.
- (7) Baillet, *op. cit.*, p. 230-231.
- (8) lettre à Villebressieu, été 1631, A-T. t. I, p. 213.
- (9) • ③ • ③ *Discours*, 6e part., A-T. t. VI, p. 61.
- ⑩ cf. lettre à * * *, novembre 1640, A-T. t. III, p. 247.
- ⑪ Pascal, *Pensées*, fr. B. 206.